介護新聞2009年4月23日

花凪屋繁盛記

連載23

人と人とがつながって

NPO法人在宅生活支援
サービスホーム花凪

木村美和子理事長

「花凪屋託児ルーム」の卒業生

旅立ちの季節を迎えた先月、「花凪屋」でも涙なみだの卒業式が行われました。この日卒業したのは、「花凪屋託児」第一号の柴田楓雅(しばたふうが)くんです。通称「ふーちゃん」は、三歳になって幼稚園に行くことになりました。

その成長を喜びながらも、今までのようにたくさん会えない寂しさにミニデイの利用者とスタッフは、卒業のはなむけの言葉の代わりに

「幼稚園ではモップがけはできないんだよ」
「ラッピングだってできないんだよ」
「先生に、いらっしゃいませなんて言ったらダメだよ」

などと、脅すような挨拶をする始末。大変大人げない次第ではありますが、それくらいふーちゃんは働き者でかつみんなのアイドルだったので、手放したくなかったのです。

そもそもは「花凪屋」オープン直後、ふーちゃんのママがベビーカーを押して買い物に来たのが始まりでした。ふーちゃんママはリサイクルショップがお好きということで、何度も来店するうちにお互いの情報が交差し、ふーちゃんが一歳になったら「花凪下宿」で看護師として働くという取り決めができました。一歳になってすぐにママはお仕事で、ふーちゃんは託児と、一日の内の七時間を離れて過ごす生活が始まりました。

泣いてくれて、ありがとう

一週間たっても、二週間たっても、泣いて泣いて泣きやまず、

「ママーー!」

と叫ぶ悲痛な声。

その当時、託児担当だったS保育士は、泣きやまないと見るとふーちゃんと一緒に散歩してきます」と言い、赤い背負い子(しょいこ)にふーちゃんを入れてさっそうと外に出掛けます。そのうちに、ミニデイの利用者や下宿人たちも一緒に散歩に出掛けるようになり、さながら「お世継ぎ様」とそのご一行という態となっていました。

いまだに忘れられないのは、泣きやんでご帰館のふーちゃんに付き添うご一行の満足げな笑顔です。みんなが寂しさに寄り添って、何とかしたいと思ってくれていたようでした。だから、誰一人「泣くな」とは言いませんでした。

それどころか、S保育士は「泣かない子の方がよっぽど心配です。お母さんと良い関係にあるからこそ一緒に居たくて泣くんですよ」。

そう言えば、一号館時代、二日だけ二歳の女児を預かったことがありました。その子も泣くに泣いて、その時ショートステイで居た女性に気を遣って外にあやしに出る私に、その方は言いました。

ふーちゃんです。ウインクがマイブームだった昨秋の彼です。今春、この笑顔で新しい世界へ

「子どもは泣くもんだからさ。泣いて死んだ子はいないから、気の済むまで泣かせなさい」

「そうか。そうですよね」

と言いながら、泣く子の気持ちと私の気持ちを思い遣ってくれたその方に深く感謝したものでした。たくさんのいろんな人に支えられて子どもは育っていくんだなと、改めて思いもしました。

大人って格好いい?

ふーちゃんの託児が始まって三カ月後にママ方のおじいちゃんが、下宿に入居しました。おじいちゃんは、気は優しくて力持ちの典型です。重たい荷物を持とうとすると、スッと側に来て「俺が持ってやるから」と代わりに持ってくれる人です。

ある時ふーちゃんは、段ボールを持ち上げようとするおじいちゃんを手伝おうとして、「危ないからいい」と言われてショボン。でも、グイッと荷を持ち上げたおじいちゃんの勇姿に、目をキラキラさせていました。

その後、やたらと重たい物を持つというのいろんな人に支えられて子どもは育っていくんだなと、改めて思ゃんに自分もなりたかったのでしょう。

「花凪屋」には、血のつながらないおじいちゃんもいました。七十代スタッフの「昭(しょう)さん」は、モップがけの先生です。いつのころからか、一緒にモップがけをするのが日課となっていました。

「柄が人に当たらないように周りを見てしなさい」

「物を寄せてふきなさいよ」

幼児さんであることを配慮しながらも、基本を教授します。

女性陣は、挨拶を。「おはようございます」「行ってらっしゃい」「お帰りなさい」「ありがとう」。食事を残すときは、残す食べ物と調理した人に「ごめんなさい」。靴をそろえるように注意した時、言うことを聞かなくてしかったところ、

「理事長と、もう遊んでやらないから」

「おやつだってあげないから」

なんて言われちゃって、思わず

「結構でございます」

と応えたこともありました。

この二年半、私たちは一緒に過ごせてとっても幸せだったけど、ふーちゃんはどうでしたか?